

‘呪われた血’の叛逆詩人(12)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

第十章 Don Juanへの執念

本稿のテーマは

——バイロンが、最高の、そして最後の、理想的女性Teresaによって詩情を駆り立てられ、情念の世界に炎えつつ、Don Juanに挑んだすがたを探り究めること——である。

Well-well, the world must turn upon its axis,
And all mankind turn with it, heads or tails,
And live and die, make love and pay our taxes,
And as the veering wind shifts, shift our sails……
The King commands us. and the doctor quacks us,
The priest instructs, and so our life exhales
A little breath, love, wine, ambition, fame,
Fighting, devotion, dust, —— perhaps a name.

いかにも、世界は
そして人類はみな
恋をし、代償を支払い
風向きが変わるとき

その軸によって廻る
この世を生き、そして死ぬ
栄え、あるひはうらぶれ。
帆もその向きを変え

王は命をくだし

藪医者ほらをふく

坊主は 説教し

そして人の世は息づく

かすかな^い呼吸を、愛を

酒を 野望を 名声を

戦いを、帰一を、^{ちり}塵を

—— おそらく名をも

詩人の、この感懷は、——1818, 12月から1819年1月にかけて、Don Juan, Canto IIをかいたころの、Byronの、疲れ果てた身体の状況を、その心情を要約するものである。

それから'veering wind'は1819年の4月の初旬に変わった。それは'tails'ではなく'heads'へと変った。そして、彼の生活は、^{いのち}生命は突如として、'love'を、'devotion'を、多量に発散し始めた。

Byronの、この突然の、'変向'にあづかった、いや、その誘因となった2人の人物は老いてなお厚化粧の、好色のBenzoni伯爵夫人と、そして一人は、58才の紅毛のほほひげを^{たくわ}蓄えた、性的奇癖の持主であるAlessandro Guiccioli伯爵——19才の伯爵夫人Teresa Guiccioliの夫——である。

この2人の老人を介して、ByronとTeresaは2度目に、Countess BenzoniがHostess役をつとめたある会談の席で相見ることになるのである。

それは、出席することにあまり気がしないTeresaを彼女がむりやり招いたこと、夫のCount GuiccioliがむりやりにTeresaを同伴したための、偶然の、二度目の2人にとっての邂逅であった。

その翌日、Byronは彼女とKissをかわし、その後、ゴンドラに招待し、舟遊びに興じ、そして自分の借りている室——それは、Byronがお抱えの売春婦たちを抱いた部屋——その隠れ家で情事へと誘いこんだ。

2 人の場合、‘一目ぼれ’ではなかったけれどもこの情事はたちまち、燃えさかる炎^{ほむら}となって消すことのできない噴煙を、火柱を吹きあげる活火山と化してゆくのだった。

Byronにとって、今や、Teresaの存在はhis own Helenとして、“生涯における最高に美しい、理想化された女性”となった。

かくて、2 人は無我夢中の、まさに昇天のムードの中に耽溺しえた愛の交歓の月日を重ね、Guiccioli伯爵は彼女をBolognaの旅へと連れ去り、RavennaのGuiccioliの館に移りすむこととなる。

Teresaは——

金髪のカール、まぶしいばかり色白の膚、キラキラと輝く美しい白い歯^{へき}、碧眼、そして豊かな肉感的、艶^{なま}めかしい姿態の、最高に美しいHelenであった。

Teresaは、当時のEuropeの名流女性の慣^{なら}わしにしたがって、女子修道院で教育され、近代的洗練をうけ、ByronとDanteを論ずることができた。

彼女は、Annabellaよりも、むしろAugustaに似て、笑いを愛した。その結婚は、政略的なものであった。

彼女の父君、Ruggero Gamba伯爵は、巨大な家族を抱^{かか}え——妻は、20番目の子供を生み落とし、まもなく他界した——したがって、Teresaのためには、金持の、それも、とても大金持の夫が必要だったのである。その意味でGuccioli伯は、巨万の富をほこる大貴族であった。

ある晩のこと——

Guiccioli伯爵は、RavennaのGambaの館で、奴隷市のbuyerのように、ろうそく[・]を手にして女性を物色中、Teresaを見初めていたのである。

すべての伊太利の娘たちは、愛のない、政略的結婚への考え方には慣^ならされていた。

Teresaの場合——

愛情生活の最初は、かくして、Guiccioliに女奴隷の如くを買われていった一人の女として始まったのであるが、そして、それは予期し、期待したものではなかったが、彼女にとって、真の‘処女喪失’ともいうべき恋情をかきたてたのは、Byronであった。

Guiccioli伯が彼女を見初めたと同様に、思いがけなく、Byronが彼女をとりこにしてしまった。

TeresaはByronの美貌にすっかり恋してしまった。——それは、Guiccioli伯の、赤ひげのimageとは全くちがった“Byronのもつ、あの、彼の身に漂う、無数の魅力に彼女は、まっさかさまに、たちまち、恋の深淵に落ちていった。

Juliaの恋人、愛人、Juanが放った確信にみちたあの文句をTeresaならば理解しえたであろう。

Man's love is of man's life a thing apart

'Tis woman's whole existence

男にとって 愛は

その生命^{いのち}とは

きり離された一部であっても

女にとって 愛は

その存在のすべて である。

Byronにとっても——

いま、Veniceの地を去りゆくTeresaが、やがて、彼にとって、その生涯の最も熱愛した女性——耽溺の愛へと落ちこんでいった‘His own Helen’の存在となりゆくであろうことは、予知しえなかったことである。

4月— ByronはTeresa Guiccioli伯爵夫人の‘Cavalier Servente’となる。

Teresaは世の慣習にとらわれない奔放さをもった女性で、その点、Byronを情熱的に恋したCaroline Lambの性格にそっくりであった。

Byronは ——

いろいろの思惑はあったけれども、結局、このTeresaの後を追うてRavennaにむかう決意を固めた。

4月の終りごろ ——

ByronはTeresaに書き送った。

“君は私のものだ——そして、これからの二人の仲が、どうなろうと、僕は、永遠に、君のものであることを誓う”と。

しかし、Teresaの病気のためByronはVeniceを発つことを延ばした。

Byronは6月、BolognaのDellegrino Innに着き、Teresaからの連絡をまつが、その手紙がまだきていないことを知るのである。結局、それはTeresaが病重く、死線をさまよっていたためだと判明した。

6～8月の間、Teresaに招かれてRevennaに滞在。

Teresaの病状が回復するにつれ、二人にとって楽園のような生活が到来する。二人は海岸沿いに松林を馬でかけnightingaleとcicadaのこえに耳を傾け、

たそがれ
黄昏のひとつきをたのしんだ。

Byronにとって、その波乱万丈の生涯にとって、これが、最高の、そして最後の樂園だった！

“Evergreen forest!……”

How have I loved the twilight hour and thee!”

“常緑樹の森よ！

僕はこの たそがれの刻を

そしておまえを

どんなに、愛していることか！

常緑の森であるがゆえに、若き、幼きまでにみずみずしいTeresaであるがゆえに、この詩人がみずからの晩年、たそがれの刻をはっきりと意識したがゆえにこそ、このように絶句した、その詩境、心境を垣間見て、多血質の情熱詩人、叛逆詩人Byronに、いま、しのびよるPathosとPassionを思う。

Teresaは、鮮やかなsky-blueの乗馬服をはいて颯爽と駈けながらも、完全には彼女の愛馬を御しきれず、彼女の馬がByronの馬にかみつくといった一幕もあり、まことにこっけいな、たのしい彼女の一面を示したが、また、彼女が美しいこえてDanteの曲を吟誦するという詩的天分の一面をも見せつけた。

Byronが‘Prophecy of Dante’をかきあげたのは、Teresaの示唆によるものだった。

この詩は——

詩人みずからの追放の身を歎^{かな}って、その数々の感懷をうたったものであり、そして、また彼自身のBeatrice——Danteの神曲の中で、理想化された女性、ベアトリーチェ——であるTeresaへの、神々しいまでに神聖化された恋情につ

いてうたったものである。そのechoを随所にうかがうことができる。

詩人は、しかし今 ——

Gambas家とGuicciolis家とのかかわり合いのゆえに、19世紀のイタリアの政争の渦中にまきこまれてゆくのである。

Ravenaは、the Romagnaの一部としてオーストリアの専制政治の下に、それと提携したローマ教皇の政治によって支配されていた。

しかし、Romagnaには、あの退廃的輕薄なVeniceとは全くちがった、独立の氣運が漲^{みなぎ}っていた。

Byronは国家主義者たちの間で影武者的存在として、みずから活動していることを自覚する。

この愛国者たちを代表するものとして、the Gamba一家があり、そしてTeresaの弟Pieroは特に熱血的闘士、愛国の士であった。

1819年7月15日 ——

Don Juan I, II がJohn Murrayによって、匿名出版された。

Byronはこの彼自身の、ものしづかな、こっけいな作品が、いかなる反響をよぶか、その批評をきくことを切望鶴首してまち望んだ。

詩の真価を‘poetry’におく、その有無によって詩は評価さるべきでmoralityの欠如を基準とする如きは’ Byronにとって ‘けいべつすべきcantにすぎなかった。’

しかし、Don Juanの詩の美しさを激賞しながら大方の批評家は、そのmorality を激しく非難し、攻撃した。

彼らはByronのmagical penによって、あのChilde Harold-typeの美しく妙なる詩を予期し鶴首してその誕生をまち焦がれたのに、それは、Don Juanは、“two black eyes” “2つの黒い眼”をもった怪物の出現であった！そしてByronの耳には、それがイタリーにおいても、祖国英国においても激怒の嵐をよびおこすのがきこえてきた。

そしてMurrayも洗面をつくり、Blackwood's Edinburgh Magazinは悪意にみちた数々の批評をのせ、親友 Hobhouse すら、これを非難した。

1819年11～12月 ——

Byronはこのとき、身辺整理のための祖国英国への帰国を決意するが Allegra の病とそして病身の Teresa の要請によって断念する。そして再び Ravenna に向う。

1820年1月、Allgraと共にホテルに投宿。

2月、Guiccioliの申出によって伯爵の館へと移りすむ。

4月 ——

Teresaと共にRavennaの社交界に出入する。

そして、反教皇、反オーストリアへの政治運動に深い関心を示す。

5月 —— Teresaの父Gamba伯爵は、Guiccioli伯爵に対して、娘夫婦の別居を申し立て、教皇裁判を仰ぐ。そして、7月14日、この別居命令が届いた。そしてTeresaはRavenna近郊の、Fillettoの父の別荘に移り住む。

ByronはTeresaの弟、Pietro Gambaに会ってNaplesの革命運動に強い関心を示すのであるが、Gamba家を通して8月、秘密結社Carbonari ‘炭焼き党’に加入する。

8月16日 ——

詩人は、はじめてTeresaをFilettoにたずねるが、以後、足繁く彼女を訪ねるようになった。

1820年の謝肉祭のさ中、Guiccioli伯爵は —— Teresaの指令によるものであろうが —— Byronに対して、伯爵のRavennaの大邸宅の階上を提供しようと、すすめてくれた。

詩人が今そこに移りすむことは、いろいろな意味で、とても好都合であった。

もっとも、この風変りな老伯爵に接近することに多少の不安を、詩人は感じただけども。

というのは、それは、老伯爵とTeressaの二人の生活を垣間見ることになるであらうから。

だが、しかし、結局そこに移りすむことに決意し、‘10頭の馬’、‘8匹の、驚くばかりに大きな犬’、‘3匹の猿’、‘5匹の猫’、‘1羽の^{わし}鷲’、‘1羽の^{からす}鴉’、‘1羽の^{たか}鷹’をつれていった。

これらの数は、のちにShelleyが彼を訪れたとき、かぞえあげたものだが、実は、そのほかに、さらに‘5羽の孔雀’、‘2羽のギニアのめんどり’、‘1羽のエジプトの^{つる}鶴’、にも、その莫大に広い階段のところで、Shelleyは、たまたまお目見えしている。

Byronがこれまですんでいた、立ち混んだ宿とちがって、今や‘^{ばら}薔薇’と‘レモン樹’と‘よく手入れのゆきとどいた、刈り込んだ常緑樹’の植込みの庭を散

歩し、アーチの道のかなたに見える^{うまや}厩を使用し、また、^{・・・}智天使の像が薔薇色に^{かが}輝く天井の下で、思うままに、思いきった、あの叙事詩への詩想をねることができた。

Byronは2月にはDon JuanのCanto III, IVを、あまりその出版に気のりしないMurrayにおくっている。

あらゆる意味で、このようにしてByronは、全面的に満ちたりたものではないとしても、むかしの、あの刺激にみちた生活へともどり、Teresaとの愛の交歓を重ねる日々を送ることができた。

そして、それは、
“……those moments. — delicious — dangerous…… the hall! Those rooms, The open doors! The servants so curious and so near ……”

“……この瞬間よ — 甘美なる — 危険な……あの、ホールで！ あの部屋で！ ドアは 開けっ放して！ 女たちは、どれも みな めずらしく、いつも すぐそばに^{はべ}待っていて……”

と、その前年、詩人は、そのみち足りた生活を鮮烈に、みずから書いている。

Hobhouseが破壊的危険思想を盛りこんだ印刷物を出版したことで投獄されたこと、そしてScrope Daviesが、Beau Brummel 同様、借金のため、国外へ逃亡しなければならなくなったことを、Byronが耳にしたとき ——

Hobhouseに深い同情をよせ、次のことばを書いた。—— それは、Byron自身、何故に、自分が英国社会から追放されねばならなかったのか、いまだにどうしてもわからないという、悲痛な叫びでもあった。

“CalaisのBrummel, BrugesのScrope, St HelenaのBuonaparte Napoleon,

そして今、独房に幽閉された君！　そしてRavennaに追放の身を^{かこ}歎つ、この僕！　そうさ！　こう思えば、いいさ！　かくも多くの、偉大な人間が、追放されているんだ！とね”

ByronがRavennaである程度——追放の身を——解放されている間に、さらに、もっともっと多くの“偉大な人間” great menが追放されてゆく、もろもろの出来事が醗酵しつつあった。

地下に潜行する革命の足音はかすかにきこえていた。Ravennaの^{まち}街の壁には、いたるところ、“民衆よ^た起て！法王を^{たお}倒せ！”と書かれていた。

Byronはこう述べた。

“こんなのは、ロンドンではとりあげるには、あまりにもくだらぬことだ。ここでは、街の壁に書きつけることは市民の特技だから。しかし、ここでは事情は違う。

Ravennaの民衆は、そのようなはげしい口調の政治的うたい文句には慣れていない。そして官憲はたえず看視をつづけ、枢機卿が紫衣の中から蒼白な眼をぎょろつかせている。”

枢機卿Rusconiは、いま、Byronを[・][・][・][・][・][・]にらみつけるごとくに凝視の眼を^{そそ}注ぎはじめた。おそらく——

今日の日まで、みちたりた生活をおくってきたGuiccioli伯爵にむかって、彼の妻と危険思想、自由思想をはらむ、解放的異邦人Byronとの仲を^き割き、関係を絶つように警告し、強くせきたてたのはこの枢機卿Rusconiだったのであろう。

かくして、いまや、Byronの‘情事’の生活の中に、政治が[・][・][・][・][・][・]からみつ[・][・][・][・][・][・]き、介[・][・][・][・][・][・]入

し始めた。

1820年5月——

ByronとTeresaがその地で情事をたのしんでいた活火山が噴火した。

Teresaの部屋の優雅な、黄、グレイ、黒のモザイク式床、そして元気なキューピッドのおかれた私室の文机がくまなく捜され、かきまぜられるという、ちょっとした事件が起きた。そして、すぐその後、ソファア上で、いちゃつき戯れているこの2人の愛人たちを彼女の夫が襲うという一幕があった。

疇高いヒステリックな叫び、すすりなく声、猛り狂うわめき声が続くハプニングがあった。

かくて、Teresaは近くのPalazzo Gambaの彼女の実家へと逃げ帰り、そして、ずいぶんと、さらに苦悩したあげく、結局父を説き伏せて教皇に申し出て、夫との“別居”の申し立てを嘆願した。

Count Guiccioliの、いろいろな奇癖のゆえに、この申し立てはTeresaに有利に運ばれていった。1820年7月14日、Count Guiccioliの要塞(とりで)は、The Gamba家の猛攻撃をうけ、Teresaは彼女の父親のもとで暮すことを条件として、そのSeparation ‘別居’は認可された。

‘horned Cuckoo’教皇としてはこの処置は、まことに不器用な、ぶざまなものであり、まずい結果を生む運びとなった。というのは、彼の考えとしてはTeresaではなくByronを追い出し、仕末することであつたのだが……

彼はByronにむかって upper-floor flatを退去せよ、との命令を出したとき、挑戦的な借家人Byronは、敢然としてこれを拒否した。

‘自分は、巨費を投じ相当数の召使、動物たちを扶養する一大家族を抱えこんでいるのだからという理由のもとに、きっぱりとこの退去命令を拒否した。

だから、幕切れの瞬間まで、パラドシカルに、このPalazzo Guiccioliの生活を十分に心ゆくまで楽しむことになったのは、結局Guiccioliの妻、Teresaではなく、Teresaの愛人、Byron卿のほうだったわけである。

Gamba伯爵は、避暑のため、一家を、Filettoの彼の所領へと移りすませた。

もっともByronはこのGamba伯爵の屋根の下で熟睡できなかったけれども、いつでも、しばしば足繁くTeresaを訪れることができ、Byronの生涯ではじめて、この、うちとけて気の合った一家の中にとけこみ、そのため創作欲も旺盛に湧いてくるのを覚えた。

Gambas一家が、より涼しくなったRavennaへと もどってきたとき、Carbonari 炭焼党の会合、そして、いろいろと策をねるための構想にいつそう徹底的にふけていた。そして、彼等に武器を調達するための軍資金を与え、かつ、自分のすまいを弾薬庫として使わせた。彼等は絶対的に Byron に信頼をよせていた。

7月には、Naplesの革命の同志たちは、ブルボン王朝の専制に対して、新しい憲章を受諾するようにとせまり、強硬手段に訴えた。——そして、Ramagnaにおける革命軍蜂起の挙が9月にむかって秘かに計画された。それは、結局、失敗に終わったけれどもRavennaの街は、どこも興奮状態のため、ざわめき、ひしめき、格闘、小ぜりあいが続いた。

そして、ときおり警官が自分の持ち場、部署で倒れた。Byronは同情心ゆえに、その息もたえだえの警官の一人を、流血の溜り場から救い上げ、自分の家へと運び入れたこともあった。

このような革命的雰囲気をはらんだ情勢の中でByronの詩情は油然とかきたてられるのであるが、みずからこの不穏な危機を詩作にとって必須なものと感じつつも、1821年の1月にはIonia島へゆくことを考えていた。そして、そのことを考えたとき、時期的には4月がよいと断じた。

それは――、

翌年の春は、ギリシヤの独立戦争が勃発するはずであったから。

そして、詩人にとって1821年こそ、滝となってほとぼしり出る詩情が、抑ええぬ情熱となって数多くの記録すべき作品を生むことになったのである。

この、tyrannyのテーマですでに1820年にはMarino Falieroがすでに書きあげられており、1821年には、さらに歴史的ヴェニス悲劇を扱ったThe Two Foscariが書きあげられた。

さらに、もう一つの詩劇SardanapalusはByron自身の‘追放’のことがもっとも多く盛りこまれている。

Assyria王Sardanapalusは、真の革命戦争の指導者として闘い、その^{きつそう}颯爽たる勇姿も力つき果て、彼のギリシヤ人奴隷Myrrhaとともに、勇ましく火葬用薪^{まき}に焼かれて死んでゆく。

詩人の胸に、たとえ夢想の中であるとしても、あのMyrrha——Cinyrasの娘、Adonisの母、没薬樹に変形した——の近親相姦のテーマは現存し、あのPrometheusの、むら気なこだまは今なお、はっきりと聞こえてくるのであり、それはコーカサスの住み家に隠遁したいというSardanapalusの切なる願い、憧憬であった。

‘The Blues’と題した、かるいタッチの諷刺詩は、別居の妻Annabellaへの憎しみと厳しい非難をうたいあげたものである。

You wed with Miss Lilac! 'twould be your perdition
She's a poet, a chymist, a mathematician (chymist=chemist)

君は ライラック嬢と 結婚した
それは 練獄への 道行となるだろう
彼女は ——
詩人、ケミスト、数学者であるからネ

‘Vision of Judement’は最も陽気に浮かれ騒ぐことのすきな、バンカラな諷刺詩人の烙印を押された詩人Byronの、類をみない諷刺詩として天下無敵の傑作であった。

桂冠詩人Southeyは、すでに彼自身の‘Vision’を出版しており、その序文で、Byronを、“詩界の悪魔派”の巨頭、旗頭である、として‘さらし者’にしている。

Byronの若き日、Cambridge大学の頃、血気にはやって獅子吼し、詩園の、群なす巨匠たちに挑戦状をたたきつけたあの雄叫びは、今は影をひそめ、詩人の最もきらった桂冠詩人Southeyにむかって劇詩の型態でironnicalに、おだやかにこたえている。

それは――

今、息をひきとり(1820年に死んだ)、悪魔が呼びつけているにもかかわらず、天国に入らんとして、その天国の門にたどりついたGeorge IIIを主人公とした劇詩である。

そこには――悪魔群と天使群との間のすさまじい活劇が展開されてゆく。多くのstoriesの展界より、天使群はすべてのToriesを意味することは、明らかに察知できるが、そのクライマックスをむかえるとき、あの冒険ずきの、ひとりの悪魔がLake DistrictのSkiddawの山荘からSoutheyを誘拐し、連れさってゆく。

Southeyは――桂冠詩人なるがゆえにByronが、その節操なきを、唾棄すべきものとして、罵倒した、その詩人――ここで、間髪を入れず、このSatanのための頭領、生涯の徳をたたえる一代記を書くことを提言する。

“美しく装幀された八ツ折り版の2巻の豪華な詩集として、それは丁寧

な註と序文をそえられた、とても読む人の心をぐいぐいとひきつける”

Southeyが自作の詩を声高に吟誦しようとするところみを迎えようとする喧噪、馬鹿さわぎのゆえにSt Peterは、やむなく彼をうちのめし、Derwentwaterの中へと、まっさかさまにつきおとした。そして、彼は、彼のことば同様、河底にひとまず沈み、やがて‘あらゆる腐爛体’の如く、河面に浮び上がるのである。

そして、その間King Geoigeは、天国へと、そーっと、うまく入ってゆく。

“かくて 喧噪が 鎮まりゆくとき

私は 讚美歌100番を弾く彼をあとにする”

1821年 ——

この年は、Byronにとって、その心の中にSatiricallyにも、そしてseriouslyにもSatanが活躍しつづけた時期だった。

この年の彼の第三の詩劇Cain — a Mystery — の中でByronは、第2の自我 — ‘悪’を讃え、これを実践する、もうひとりのByronと取っ組み合うのである。the evil-doer悪を信奉する、もうひとりのByronは多くの外敵にそのかされるのではあるが、それにしても、しかしながらByronの心の中には、悪を礼讃する強い血が厳然として、生まれながらにして —— 父祖の血をうけ継いだ、あの‘気狂いJack’、‘悪殿様’の血をさながらに頂戴した —— 流れていた！

そして、その血よ！ さわけ、さわけ！とSatanがしきりとたきつけ、あふりたてるのだった！

Childe Haroldの如くCainも追放者である。Childe Haroldはしかし、一巡礼者であるが、Cainは無法者である。2人とも、目的地をもたない放浪

者である。

Byronの第四の詩劇であり、第二の怪奇なる物語詩である“*Heaven and Earth*”は10月に、これを書きあげている。

それぞれのMysteryにおいて、Satanは、神が——‘Adam以前の創造’と‘ノアの洪水’の時期のように——結局は破壊のために創造したことのゆえに、神をこらしめ、つるしあげにし、真向うから、やっつけるのである。

ここでは、——

Cainのみが絶滅した動物たちに憐憫^{れんぴん}の情をよせるのである。そして、魔王Satanは（1817年に出版されたCuvierの‘*Animal Kingdom*’の協力を得て）、この動物群を彼に示すのである。即ち、Japhetのみが、ひとり、彼の救助のために浮んでいる、ノアの箱舟をじっと見守りながら、苦悶の表情をうかべ、“何故に、すべてのものが滅^{ほろ}びゆくとき、何故に私が生きのびねばならないのか”と、悩むのである。

この、2つの挑発的詩人の作品は、翌年、出版の運びとなり、世間に恐るべき衝撃を与え、それゆえに、罵倒と非難の嵐を浴びるのである。

しかし、このとき——ByronがDon Juanを書くことをTeresaが反対したのに、その代りにCainをByronが書き出版する運びとなった。——

Teresaが、このことを何故？だろうと、自らに問いかけたのは、いかにも、もっともであったのだ。

Byronがこのようにして、自己の生涯の最高傑作を生むべく詩作に没頭し、敢て、それを公表し‘悪の世界’に新しい倫理を創造しつつ、さらに、Don Juanへと挑戦しつつあった。その間——

Byronにとっても最大の関心事であった革命運動は、あちらこちらで烽火^{のろ}を上げつつも、散発に終る弱いもので、足並みの揃わぬ不統一のゆえに、

崖^{がけ}つぶちに追いつめられ、よろめく千鳥足の、か弱^{・弱}く、もろき、あわれな姿をさらした。

そして、これはByronが最も恐れ、かねがね苦慮してきた最悪の事態であった！

Austria軍は—— Byronはこれを‘Huus’フン族——(4, 5世紀頃, ヨーロッパを侵略した, アジアの遊牧民——, Barbarians野蕃族とよんだが—— The Carbonari (炭焼党员, イタリア共和国, 秘密結社)が烽起する前に, すでにPo河をわたって, 出し抜くことにより, これを撃破し, さらにNaplesへと破竹の進軍をつづけた。そして—— この月の終りごろまでには, もっと悪いニュースが伝えられた。それは, Naplesの暴動は完全に鎮圧されてしまった, というニュースであった。そして—— 最悪のニュースが伝えられた。それは, この日Pietro Gambaが官憲により逮捕され, そして, 彼と彼の父は, Papal Statesを追われ, Tuscani地方へと追放された, というニュースだった。

Teresaは、涙と、心変り、そしてByronが彼女の後に従うであろうことへの信頼と疑惑の相錯綜した気持が嵐の如く猛^{たけ}る中を、7月25日、Ravennaを去ってFlorenceの父と兄の許へと加わるのである。

彼女にとって、これに代るべき残された道は唯一つ、それは女子修道院へと亡命することであった。

官憲はすでにCount Guiccioli同様、時機を得ない馬鹿さかげん^{きん}を曝^{さら}けだしていた。というのも、彼等の最大の、真の願いは他にはなく、ただByronの追放の姿を見ることにあったのだから。

ByronはひとりRavennaに残った。彼の“Vision of Judgement”の中のGeorge IIIのように、Byronの願望は全般的な混乱にまぎれて、みずからの王宮なる平和な天国にしのびこみ、音楽を奏でることであった。

このような願望にもかかわらず、とにかく Teresa と合流しなければなら
ないということは、今、痛切に感じられた。しかし、この旅への出発を 3 ヶ
月延ばした。

結局、この旅への出発を可能にしてくれたのは Shelley だった。

Shelley が今、彼の家族を住まわせている Tuscan Pisa の地に、Byron と
Gambas 一家のために、それぞれ mansion を 2 つ借りてやることによって、
Byron の出発を決心させてやったのである。

Shelley は結局、詩人にとって Ravenna で、楽しい思い出を提供して
やった恩人として Byron のために尽してやるのだが、Pisa における Byron
の新しい生活の中で、Shelley が、その中心人物となるのである。

女子修道院に Allegra を訪ねることが、この Ravenna での生活の基点を
去りゆく前にやらなければならない、一つの大きな目的であった。

Shelley の場合、Allegra の父親 Byron と違って Allegra が彼に詩情のやさ
しく、妙なる情念をかきたててくれたのである。そして、その気持を彼は、
彼の作品 ‘Julian and Maddalo’ の中で、はっきりとのべている。

A lovelier Toy sweet Nature never made,
A serious, sublle, wild yet gentle being....

かくも 愛くるしき やさしき玩具よ
自然の^{たくみ}巨匠ですら 創り得ないだろう
その真剣な^{たえ}妙なる はげしい
だが やさしい この^{いのち}生命を

Shelleyにとって、Byronは――

この年の8月のある時期は、心のふれ合った最も中心的人物であったことはたしかである。

ShelleyはByronを信じた。――

“勇敢な魂をもつかぎり、Byronはきっと蘇^{よみが}えり、活^{いき}気づくであろう。もし、Byronが貴族の出という癌^{がん}の病に悩まされなかったら、彼は最も寛大な、最も意気軒昂たる闘志の人であったろう”と述べている。

そのころ、ShelleyはBagnacarloまで20 (mile) マイルの道をはるばるとひとりで踏破し、Allegraへの、心からの信頼をかちえたのであるが、彼女の白いモスリンのドレスを、黒いシルクのエプロンを、ズボンをほめたたえ、そして、狂える如く廊下を駆けくらべし、彼女がいたずらっぽく修道院のベルをならすのを聞き入り、そして修道女達が、皆彼女を親切に導いてくれていることを確信しえたのである。

8月28日、Mother SuperiorはByronを招待して、彼の娘に会わせ、娘の修道院を見学させようとしたが、Byronは、都合があつてそれを果すことができなかった。

Allegraは手紙でByronに“市^{いち}でショーガ入り菓子パンを買うからお金をもってきてちょうだい”と、いかにも小さな子供らしいた^だのみを書いてよこしていた。

しかし、そのためByronは娘に会うための修道院訪問を延期した。というのは、たとえそれが、4才の娘baby Byronであっても、そのようなCupboard-love “欲得^{だき}づくの愛”を詩人はとてもきらい、これを知ると身悶えするほどに唾棄すべきこととして、神経質にこれを拒んだためである。あるいは、自分自身の側の、より深い反逆心を合理化するためにも、このCupboard-loveをむしろ利用することさえした。

そのような意味で、ByronはAllegraがほんとうに好きになれなかったのでは

る。

“何故、Teresaの出発前に、うんざりするあの、たびたびの馬鹿騒ぎと船遊びをずいぶんとがまんしてきて、まだ、なおAllegraにあつて、たいくつな場面を経験するという危険を犯す必要があるのか” Byronはそう考え、Mother Superiorの招きに応ずることを引き延ばしたのである。

Byronは、自分の娘の性格を‘perverse’‘つむじまがり’とよび、その気性を‘violent’‘^{はげ}烈しい’とそうよんだ——が事実、たしかにそのとおりだったのであり、そして、結局は修道女たちが彼女を預って、彼女の世話をひきうけることになったのである。

Ravennaのだれもみな、この、立派な、自由を愛する、寛大な、高貴な詩人Byronが、今、この地を去ろうとするとき、そのわかれを惜しみ、涙を流した。Byronの愛車、今は長途の旅でやつれた、あのNapoleonの馬車^{なぞ}を擬らった愛用の馬車が、1821年10月29日、Ravennaの街を、がらがらと音をたてながら去ってゆくのであった。

ある意味では、いや、いろいろの理由で、この愛車^{・・・}の持主も、“愛車^{・・・}ともども、自分もくたびれた、疲れ果てた”としみじみと、わが身をふりかえり、そう感じた。そしてその感懷を、自分の最後の誕生日にかきつづった。

Through life's road, so dim and dirty,
I have dragged to three-and-thirty,
What have the year left to me ?

あまりにも　くらく　^{けが}穢れし人の世を
よくもまあ　この現^{うつし}し身をひきずりし　33の歲月よ
その齡よ　われに　何をのこしたというのか？
なに一つ^{ひと}のこさなかった—30と3の齡のみしか

寂しさに、しみじみとByronは述懐する。あの血気にはやった、そして、身を
なげだして叛逆し、身をなげ出し恋をして、狂うが如き詩想を紙面にたたきつ
け、祖国、英国を敵にまわし、最後に、妻Annabellaより追放されて、その悲し
みを異郷に癒した、いかにも劇^{ドラマチック}的なその生涯の老境(33才)に、わが人生は
所詮無なりという。

だが、しかし、その述懐こそ大いなる誤算であろう。

Byronの生きた、その生涯は、彼に—————

彼の最も偉大な数々の、溢れるばかりのきらびやかさをたたえた、数万巻の
詩集を、その遺産として残している。

そして、その一巻一巻が、いづれも政治的倫理的いかなる理念も、これをそ
こなうことの出来ぬまま、ただただ読者に、歎びと満ちたりたところを与える
傑作の数々である。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Vewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.